室蘭工業大学
学術資源アーカイブ
Muroran Institute of Technology Academic Resources Archive

1920年代から1930年代中国周縁エスニシティの民族覚醒と教育に関する比較研究. 標題紙 目次 はしがき

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2015-04-02
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 松本, ますみ
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/10258/3793

室蘭工業大学
学術資源アーカイブ
Muroran Institute of Technology Academic Resources Archive

1920年代から1930年代中国周縁エスニシティの民族覚醒と教育に関する比較研究．標題紙 目次 はしがき

著者	松本　ますみ
雑誌名	1920年代から1930年代中国周縁エスニシティの民族覚醒と教育に関する比較研究
発行年	2015-03
URL	http://hdl.handle.net/10258/3793

はしがき

松本　ますみ　（室蘭工業大学工学研究科）

本報告書は日本学術振興会科学研究費補助金、基盤研究（B）「1920 年代から 1930 年代中国周縁エスニシティの民族覚醒と教育に関する比較研究」研究課題番号：24320143 研究代表者（室蘭工業大学　松本ますみ）平成 23 年度―25 年度の補助を得て行われた共同研究の成果をまとめたものである。

1920 年代から 1930 年代という時代は、いわゆる第一次世界大戦期から第二次世界大戦期の「戦間期」にあたる。この時代は現代中国や日本研究者にとっては非常に興味深い年代である。日本では大正デモクラシーを経て、軍部が擡頭し、山東出兵を経て、ついには中国東北部の利権を求めて満洲国建国、2.26 事件をへて日中戦争の泥沼に落ち込んでいく時期である。大正デモクラシーで花開いたと思われた言論の自由は、1925 年の治安維持法により、社会主義運動への取り締まりとともに「挙国一致」体制へ道をつけた。戦争への軍靴の音の中で言論界は自粛・検閲を余儀なくされ、対中国強硬論への反論を一蹴した。それが、満洲事変（柳条湖事件）へとつながり、盧溝橋事件からの日中全面戦争へと拡大していくわけである。

では、中国においては、同時代どうであったか？ 1920 年代といえば五四運動後、民主と科学がもてはやされ、そのような開明的な雰囲気の中で中国共産党も誕生した。当時の中国は軍閥割拠の時代であり、北京政府と広州政府の二つに分かれていた。1924 年の孫中山は「中国国民党第一次全国代表大会宣言」でソ連との連携をはかり国民党による中国統一をめざした。

孫中山の三民主義の中で、もっとも彼が重要視したのが、「民族主義」である。振り返れば、「民族」という言葉自体は西欧語の nation, Nation を日本人が翻訳しそれが清国留学生によって中国語にもたらされたものである。この言葉は、瞬く間に東アジアに波及し、各国語に定着した。1920 年代から 30 年代には「中華民族」という概念も一般化した。2014 年に、習近平中国国家主席が「中華民族の偉大なる復興」という概念を提唱したことからもこの言葉が現代的意味を持っていることは明らかである。現在、中国では「民族」認定はされているものの、独立権がない「民族」が 56 ある。これは多数派 90%以上の漢族も「独立権」がない、ということを逆説的に意味する。中国語には独立権がある「中華民族」とそれを構成する独立権のない「民族」が双方存在するということになる。このような定型化した言説が生ずる以前、「民族」に関して、もっとも活発に議論が戦わされたのは、日中戦争（抗日戦争）の始まる以前の 1920 年代と 1930 年代の各種メディア（雑誌、新聞等）

上におけることであった。

1920 年代から 1930 年代は、一般的にいって、さまざまな言論の「自由」があった時代であった。印刷業の開業、活字文化の隆盛と郵送事業の展開、さらには科挙廃止後の新型知識人の誕生、そして言論弾圧を目論む強力な統一政府の欠如により、空前の言論界の活況と「自由」がもたらされた。その中にはマルクス主義あり、民主主義あり、共和主義あり、アナキズムあり、女権問題あり、エログロあり、漫画あり、グラビア雑誌あり、ナショナリズムあり、宗教宣伝誌あり、教育問題研究誌とまさに「百家争鳴」の時代であった。

本報告書は、中国周縁エスニシティの民族覚醒に対し教育とメディアが及ぼした影響について特に 1920 年代から 40 年代のタイムスパンに絞り、北方のモンゴル人（現在のモンゴル族)、回民（現在の回族)、中国の朝鮮人（現在の朝鮮族)、中国西南地方の苗・夷・蔵（現在の苗族、彝族、蔵族）の 4 ケースについて比較検討しようとするものである。この時代、中国周縁エスニシティは他者との出会いを通して、独立、自立・自尊運動、あるいは「民族」としての覚醒運動を起こした。その方向性は、あるものは中国や日本からの政治的独立、あるいは中国や日本による統治の逆政治利用、あるものは中国領域内での文化的・社会的権利獲得、中国以外の地からの知の流入と人的関係構築による民族自覚と多様であった。彼らの自立・自尊の契機がどのような政治的勢力や圧力、経済的問題、教育思想、居住・生活形態と関わっていたのかを本研究では比較検証する。それによって、混迷を深める中国の民族問題の根源とその解決の一端に迫ることを目的としている。

まず、北方のエスニシティから始めてみよう。

第一章の楊海英「モンゴル騎兵に関する日本語の歌―軍人民族主義者たちの覚醒―」は、日本がつくった興安軍官学校とそこで歌われた日本語軍歌について、モンゴル人の覚醒との関連を論じている。

かつて、1920 年代にモンゴルを放浪した石塚忠はその著書『謎の蒙古』（日蒙貿易協会、1930 年）で、次のように言っている。

「また懐ふ東亜の英雄児成吉思汗、吾は汝を愛す。汝を愛するは汝が源九郎の後身たる想像を描かしむるためではない。蒙古統一後馬首を回らして中央亜細亜より遠く西の方欧羅巴に攻入りたる勇気は、上下三千年東洋に独り汝あるばかりである。事茲に至れば漢楚の英傑も三国の名将も蝸牛角上の争ひに耽けり気を吐くの値ひなく汝が前に拉し来れば月前の蛍火に過ぎないのである。蒙古族はしかく不屈不撓の勇猛心があった。其の性質は素朴にして稚気愛すべく、若し喇嘛教の信仰から醒めたならば辺境守備の亜細亜民族として外敵の東漸を阻止する充分の力倆を備へてゐる。吾人は活仏の転生よりも寧ろ成吉思汗の再来を蒙古のために希望したい。」(pp. 38-39)。

「満洲事変」の 1 年前の文章である。ここでは、まさに、チンギス・ハーンを英雄視したい日本人がおり、その日本人は、不屈の精神を本来持っているはずのモンゴル人が喇嘛教によって「麻痺」され本来の尚武の精神を失っていることを嘆き、チンギス・ハーンの

再来を期して（帝国日本のための）赤化の防波堤となることを期待している。このある種の日本人の思いや夢は時宜を得たように「満洲国」建国以降モンゴル人居住地区に実行に移されるようになった。1934 年に「陸軍興安軍官学校」が創立された。育成された精鋭のモンゴル騎兵たちは日本語による日本精神を自分のものとし、さらにチンギス・ハーンの子孫としてのモンゴル人としての民族覚醒を鼓舞すべく日本語の校歌・軍歌を熱唱した。

楊海英論文ではメロディーがついていないが、歌詞とメロディーが合体され、歌われた時、それは理性よりも感情に訴えるメディアになる。それは、現在でも伝統校の卒業生が同窓会等で自分たちの紐帯を確認する出身校の校歌を合唱する様子と相似形にある。日本が国内で近代教育を開始するに当たって、まず着手したのが「文部省唱歌」と「校歌」の制定、会社であれば「社歌」の制定であったことに思い至る。このモードに入れば、あとは自発的に「応援歌」や「寮歌」が作られていくこととなる。ある組織への帰属意識は「使命」や「その中で活躍する自分のヴィジョン」を織り込む歌を歌うという行為の中で身体化して共有される。そのモジュールを海外「植民地」や「傀儡政権」に移入した時、ある一種の日本人のモンゴルやユーラシアへの思い入れ（赤化の防壁、広大な地下・地上資源の活用、ヨーロッパへつながるシルクロードの通商ルートの掌握、ジェンダー化された世界征服の夢）と現地モンゴル人の別の思惑（「シナ」からの独立、外蒙古との聯合、モンゴル帝国の再興の夢）が感情の交叉という形で作用したということも充分考えられる。その意味では、「歌」の研究はその覚えやすいメロディーとともにいかなる心理作用を個人に、集団にもたらし、民族覚醒にもたらしたのか、という観点もこれから必要になってくる。

海野（山崎）典子論文は、「清真」という中国イスラームの別名に焦点をあてて、ハラール食問題をムスリムと非ムスリムのメルクマールとする言説を 1910 年代にムスリム知識人によって刊行された『正宗愛国報』という雑誌を一次資料として論じている。豚肉を多く食する漢人社会の隣にあって、ムスリムがムスリムであるためには、「豚」を不浄であると忌避する以上に、近代的概念である「衛生」観念において、「漢人」より科学的にも凌駕しているという矜持を保ちアピールを続けなければなかった。「清」と「真」はもともと、中国イスラームにおいては唯一神＝「真主」（アッラー）の本質を表わすものとして解釈されたが、ムスリムはその神の本質を受け継いだものとして「清く」「真に」現世を生きなければならない存在であるということが、『正宗愛国報』における 20 世紀初における食生活に関する議論にも生かされている。ハラール問題は 21 世紀の現在でもヴィヴィッドな問題であるが、その議論がすでに 100 年前の中国活字文化の中で花開いていたということは非常に興味深い。

松本ますみ論文は、近現代中国におけるイスラーム教育においてなぜペルシャ語とペルシャ語テキスト学習が緩慢に消滅したのか、そして、その中で天津付近の 3 つの「荘」でなぜ化石のように現存しているのか、について論じている。消滅の第一の原因として、近代主義導入の中で、漢語学習とペルシャ語学習が拮抗し、結局、漢語学習のほうが実利的・合理的とされて漢語とアラビア語との双語学習が選択されていったことが挙げられる。第

二の原因として、ペルシャ語文献（たとえば、*Ashi'ah al -Lama'at*）の内容である存在一性論が、近代イスラーム世界の潮流の中で「時代遅れ」と見做されたことが挙げられる。第三の原因として、1958 年の宗教民主改革キャンペーンから文化大革命の収束までの打ち続くのべ 20 年間の宗教弾圧の中で、ペルシャ語知識を継承した知識層がほとんど消滅したことが挙げられる。しかしながら、一部は継承された。その一因として、日本の 1937 年～1945 年の華北占領期におけるイスラーム政策のボタンの掛け違いを指摘した。華北・蒙疆を占領した日本はイスラームの教義内容に深く関与しなかった。いや、その深淵な意味を解するものが日本統治者側の研究者にもいなかった。漢語がわかる対日協力者が日本人に対応するその影で、ペルシャ語文献を読める宗教的知識人が経堂（マドラサ）にて綿々と養成され続けた。それは日本敗戦後、中華人民共和国になっても 1958 年まで続いた。その結果、意図せざる結果として文革の混乱が収束した後、ペルシャ語学習と存在一性論の教義を理解していたものが復権し、その教えの学統は天津付近にわずかに残す結果となったことを指摘した。

新保敦子論文は、日本占領下北京における、ムスリム女子に対する中等教育機関実践女子中学についての論考である。もともとは、成達師範学校設立者や賛同者を中心としたイスラーム改革派たちが、近代女子教育は重要であるとして創立したのが「新月女子中学」である。それを「居抜き」で引き継ぎつつも日本式の「良妻賢母」教育機関として作り上げたのが「実践女子中学」である。ムスリム女性も非ムスリム女性も受け入れた。しかし、当時の中学に進学するようなエリート女性にとっては日本式の「家事、裁縫、掃除」といった家政学を中心としたカリキュラムは不満で、「実践女子中学」が何度も何度も募集広告を出すも定員に達しなかったことが中国回教総聯合会の会報『回教週報』記事を通して立証される。日本の「近代的」教育制度をムスリム女性に強制しても、結局他者の価値観を理解できないものによる教育支配は当然失敗に帰する、と論証している。

権寧俊論文は、日本の朝鮮半島支配後、中国東北部の「間島」（現在の延辺朝鮮族自治州）やその他の東北地方に移住した朝鮮人の 20 世紀初の政治運動の軌跡を描く。朝鮮独立を画策した運動の中で、独立軍の人材養成のためには「民族自治」「民族教育」「武装抗争」のために多くの「民族学校」が作られた。その中でも「新興武官学校」とその卒業生たちは、その後の中国東北、関内における抗日独立軍の幹部となっていった。またその他の民族学校の卒業生も、朝鮮人民族教育の立役者となっていき、「朝鮮独立基地建設運動」に大きな役割を果たした。しかしながら、独立をめぐる路線・分派対立もこの間顕在化していき、結果的に 1930 年代以降の独立運動の統一を妨げる結果となったとする。ここで注目すべきは新興軍官学校の教員が大韓帝国陸軍武官学校教員で占められていたこと、民族独立運動が、軍事部門の他に刊行物の発行、小学校の設立、労働講習所の設立といった「教育」「宣伝」に力を入れていたことであろう。日本による本国の植民地化という状況の中で、独立運動が中国東北で活発に繰り広げられていたが、そこには、20 世紀現象である近代教育と宣伝という手法が取り入れられていた。楊海英論文では日本主導によって創立された「陸

軍興安軍官学校」において、日本の軍事力や近代性を利用しながら「シナ」の伸張を排除するモンゴル民族覚醒が語られたが、朝鮮人の場合は、「新興武官学校」やその他の民族学校が明らかに朝鮮人主導のもとに設立され、日本からの朝鮮独立のために機能する人材を育てた。その意味では、両者の約 20 年のタイムラグや朝鮮人とモンゴル人が置かれた状況の違いを考慮しなければならない。それと、同時に、やはり軍エリートを養成する男性のみの学校の在り方とジェンダー化した「民族独立」「民族覚醒」を、近代の世界史の比較の視点で見据えることも重要であろう。

吉開将人論文は、中国西南に住む「苗」「夷」「蔵」といったエスニシティが、いかに 1949 年以降の中華人民共和国域内に取り込まれていったのか、その過程を明らかにする。西南はモンゴル人や朝鮮人、中国ムスリム（「回」）とは異なる点がある。それは、第一に伝統的羈縻政策を色濃く残した場所であったことで、国民党政権時代の民族政策がそれらエスニシティのエリートをうまく利用し国民統合を進めようとしていったという点が挙げられる。第二に、中国共産党の長征中にチベット人の博巴政権という「民族自決」原則に沿った政権が一時期成立したことがあるという点も挙げられよう。さらに第三に長征中に現地のチベット人と食料をめぐり軋轢を起こした、という事実があるという点、第四に、共産党自体、長征期この西南に長く留まらず、少数民族工作に関する経験が希薄であったという点を挙げることができる。それら諸事実を考慮した鄧小平は、1949 年 9 月に第二野戦軍「少数民族工作に関する指示（草案）」を提出した。そこには、国民党の下で高度な軍事教育と国民教育を受けたことのあるエスニシティのエリートを「少数民族幹部」として再教育すること、過去の長征中の食糧をめぐる共産党側の過ちについて謝罪することによって、彼らエリートと彼らの所属するエスニシティ全体を共産党側につけることができ、結果的に共産党の支持基盤に仕立て上げるという方針が記されていた。その意味では、「民族区域自治」とは西南の特殊な地域性をも考慮した政策であったともいえる。特に、本論は、1949 年 9 月の第二野戦軍「少数民族工作に関する指示（草案）」の史料としての重要性を提起したという意味においては非常に重要といえる。

〇事業内容：研究会・講演会・シンポジウム、国際フォーラム、国際シンポジウムの開催

2012 年度、2013 年度、2014 年度の 3 年間、次のように合同研究会・講演会、シンポジウム、国際フォーラム、国際シンポジウムを開催した。

１）合同研究会

2012 年 4 月 28 日　於：敬和学園大学　J211 教室

13:00～13:30　　事務連絡　　趣旨説明　（松本　ますみ）

13:40～14:20

松本ますみ（敬和学園大学）「なぜ 1920 年代から 30 年代なのか？エスニックな覚醒とし

ての中国イスラーム新文化運動を例として」
14:40～15:20
吉開将人（北海道大学）　「１９３０年代西南民族エリートの抬頭と国共両政権の角逐—教会教育と中央政治学校・軍官学校の役割を中心に」
15：30～16：10
楊海英（静岡大学）「中国の文化大革命とモンゴル人大量虐殺事件」」
16：20～17：00
権寧俊（新潟県立大学）「韓国臨時政府と趙素昂の三均主義」

17：00～17：40
ディスカッション
20：00～20：40
新保敦子（早稲田大学）　「民国時期における民衆教育とナショナリズムの形成」

2012 年 4 月 29 日（日）
於：敬和学園大学　J211 教室
9:30～10:10
花井みわ（早稲田大学）「在満朝鮮人の近代教育の受容と葛藤：１９２０年代～１９３０年代」
10:20～11:00
全体討論、今後の方向性・計画について

２）講演会
2012 年 12 月 1 日
10：00～12：00
主催講演：池田嘉郎（東京理科大学）「ソヴィエト帝国論の新しい地平— - 1920 年代—30 年代のソ連民族政策」於：東京理科大学 PORTA　神楽坂　7 階第 3 会議室

３）合同研究会・ミニシンポジウム
2013 年 5 月 25 日（土）
13：00～16：45（会場：北海道大学人文・社会科学研究棟３階Ｗ３０９教室）
ミニシンポジウム「近代中国周縁エスニシティの民族覚醒と教育に関する比較研究」（北大史学会例会を兼ねる）

１.松本ますみ（敬和学園大学）「中国イスラーム経堂教育の「凋落」と天津周辺における「保存」：近代主義者、「保守主義者」と日本占領下の華北の対回教政策」

２.権寧俊（新潟県立大学)「１９１０年代の中国東北地方における朝鮮人社会と新興武官学校」

3. 吉開将人（北海道大学文学研究科「福音主義と２０世紀中国の民族史論」

４）合同研究会

2013 年 11 月 20 日　於：早稲田大学　14 号館　804 号室

14：00～14：20　松本　ますみ　（敬和学園大学)
「資料紹介：華北交通編集『北支』・華北交通写真にみる日本占領下華北・蒙疆の「少数民族」表象と「帝国の知」」

14：20～15：10　新保　敦子（早稲田大学)
「日本占領下における中国少数民族教育」
コメンテイター：権寧俊

15：10～16：00　山崎　典子　（東京大学大学院)
「アブドュルレシト・イブラヒムの中国旅行：ロシアのタタル人ウラマーが見た清末ムスリム社会」
コメンテイター：松本　ますみ

16：10～16：50　サラントヤ（東京大学大学院）　山崎典子氏　代読
「内モンゴル知識人の覚醒と出版活動」（仮)
コメンテイター：　楊海英（静岡大学)

16：50～18：00　全体討論

6）合同研究会合宿

日時：2014 年 6 月 7 日（土）～8 日（日）

場所：室蘭工業大学　Q502 号室

14：00～15：00　山崎　典子（東京大学（院))「台湾での文献調査について：1938 年末の中国ムスリムのマッカ巡礼に関する史料を中心に」

15：15～16：15　花井　みわ　（早稲田大学)「国共内戦期におえる関東女子高等学校出身者の社会的上昇
コメンテイター　吉開将人（北海道大学)

16：15～17：00　全体討論（司会：楊　海英　（静岡大学)

6 月 8 日（日）

10：00～　12：00

松本ますみ　「過去 2 年間の研究の総括と、2014 年 12 月　早稲田大学国際会議場における国際シンポジウムに関して」
コメンテイター　権　寧俊（新潟県立大学)

７）国際フォーラムの共催

「国際フォーラム　1920 年代～40 年代における中国回族―オーラルヒストリーに焦点を当てて―」

日時：2014 年 12 月 19 日（金曜)13 時 30 分～16 時 30 分
会場：早稲田大学国際会議場 4 階　第 1 共同研究室　（使用言語：中国語）

開会挨拶　新保敦子（早稲田大学）

朱海珅（内蒙古科学技術大学）「清代土默特地区草原保护研究」

王继霞（内蒙古科学技術大学）「亦朝亦野：口述史视野下民国时期回族知识分子的精神抉择」

妥佳宁（内蒙古科学技術大学）「Ambivalent Choice of the Hui Muslim Intellectual under the Mengjiang Regime」

松本ますみ(室蘭工業大学)「華北交通写真にみる中国ムスリム」

総合討論
☆主催；早稲田大学現代中国研究所（NIHU プログラム現代中国地域研究プロジェクトによる）
☆科研基盤研究 C「現代中国の少数民族における家族の変容と文化伝達に関する教育学的研究」（研究代表：新保敦子）公開研究発表会
☆共催　科研基盤研究（B）「１９２０年代から１９３０年代中国周縁エスニシティの民族覚醒と教育に関する比較研究」（研究代表：松本ますみ）

☆２０分発表　１５分討議

８）国際シンポジウムの開催

2014 年 12 月 20 日、於　早稲田大学国際会議場第三会議室
「20 世紀初、中国周縁エスニシティの覚醒に関する比較研究――メディア、移動、政策－」

13：00～13：10　松本ますみ（室蘭工業大学）　挨拶、趣旨説明

13：10～13：50　基調講演　Ma Haiyun 馬海雲　（Frostburg State University、US）”The Middle East and the Middle Kingdom: the decline of the Ottoman Empire and its impact on Chinese Muslims in the early 20th century”

13：50～14：05　コメンテイター：鈴木規夫（愛知大学）

14：05～14：20　質疑応答

14：35～　　パネルディスカッション（司会　松本）

14：35～14：55　山崎典子（東京大学・院）「清く食べ、真に生きる――近代中国におけるハラール問題と「回漢」関係」

14：55～15：15　楊海英(静岡大学)「モンゴル騎馬兵に関する日本語の軍歌」

15：15～15：35　ハスチムガ（宇都宮大学・院）「内モンゴルにおける善隣協会の衛生・医療活動に関する一考察」

15：35～15：55　権寧俊（新潟県立大学）「20 世紀初の中国東北地方における朝鮮人社会と新興武官学校」

15：55～16：15　吉開将人（北海道大学）「「羈縻」政策と 20 世紀中国：第二野戦軍「関於少数民族工作指示草案」から見た西南民族エリート問題」

16：30～16：50　パネルディスカッション　コメンテイター：新保敦子（早稲田大学）

16：50～17：30　全体討論　（司会　松本ますみ）

17：30～17：40　総括　　澤井充生　（首都大学東京）

17：40～17：50　終わりの挨拶　松本　ますみ

後援：早稲田大学イスラーム地域機構、早稲田大学アジア研究機構現代中国研究所

○　本科研の構成メンバーは以下のとおりである。

研究代表者　松本　ますみ（室蘭工業大学）
研究分担者　大野　旭（楊　海英）（静岡大学）
研究分担者　小林（新保）敦子　（早稲田大学）
研究分担者　権　寧俊（新潟県立大学）
研究分担者　吉開　将人（北海道大学）
研究協力者　池田　嘉郎（東京大学）
研究協力者　Ma Haiyun　（Frostburg State University、US）
研究協力者　海野（山崎）典子　（東京大学大学院）
研究協力者　花井　みわ　（早稲田大学）

研究協力者　サラントヤ　（東京大学大学院）
研究協力者　ハスチムガ　（宇都宮大学大学院）
研究協力者　鈴木　規夫　（愛知大学）

○　本科研の補助金額は以下の通りである。

総額：14170 千円

2012 年度：5330 千円（直接経費：4100 千円，間接経費：1230 千円）

2013 年度：3510 千円（直接経費：2700 千円，間接経費：810 千円）

2014 年度：5330 千円（直接経費：4100 千円，間接経費：1230 千円）